

58 近代初期解剖学書における筋の名称について

澤井 直

順天堂大学医学部解剖学教室

Andreas Vesalius (1514-1564) の『人体構造論』(De humani corporis fabrica, 1543) は優れた図を備えていた。ポーズをとる骨格図や全身の脈管図、緻密な内臓図など図そのものが優れたものであり、また各部に記号が付され、本文で言及される部位と図での位置が正確に対応づけられている点もそれ以前の解剖学書とは異なっている。

特に筋肉の図は他に類を見ないものだった。

Vesalius は一連の筋肉図において、最初に全身の皮膚を剥いで表層の筋肉が見えるようにして、骨格図と同様にポーズをとらせた図を提示し、徐々に筋肉を切断して深層の筋を描いていく。切断された筋をだらりとぶら下げた図はグロテスクながらも、筋の層構造を的

確に示す図となっている。近代解剖学における筋肉の研究は Vesalius の解剖図から始まったのである。

では Vesalius は『人体構造論』においてどのような名称をつけていたのだろうか。Vesalius による筋の名称は現在の我々のものとは大きく異なっている。現在では各筋肉に固有の名称が与えられ、その名称と実際の筋との対応付けを身につけたもの同士の間では、名称に言及するだけで情報の交換が可能である。

しかし、Vesalius はそのような固有の名称を与えていない。彼は一般に筋肉の位置、作用によって筋を区別し、同じ位置、作用の筋には序数や上下・前後によって区別している。例えば 上腕二頭筋は「前腕を曲げる前筋」、上腕筋は「前腕を曲げる後筋」、大殿筋は「大腿を動かす第一の筋」、中殿筋は「大腿を動かす第二の筋」と呼ばれている。

このような名称は Vesalius の書だけを読む場合には特に不便なものではない。また他の解剖学者が Vesalius による名称を踏襲した場合にも問題は無い。

『人体構造論』の図と本文を見れば、筋とその名は対応

づけられるからである。

しかし事態はそうは進まなかった。Vesaliusの研究に触発され、多くの解剖学書が出され、またVesaliusによる名称は踏襲されなかった。

Realdo Colombo (1516-1559) や Gabriele Falloppio (1523-1562) はVesalius同様に位置・作用・序数によって筋を区別しているが、序数の付け方は記述の順序に基づいているために、Vesaliusと必ずしも一致しているわけではない。そのため複数の解剖学書を読んだ場合には、名称に関して戸惑いを感じたことは想像に難くない。

一七世紀に入ってGaspard Bauhin (1560-1624) の『解剖劇場』(Theatrum anatomicum, 1605) では、上腕二頭筋は「Biceps」、上腕筋は「Brachiaeus」というように、現在のものと同様の筋の名称が与えられている。指の筋などには固有の名称が与えられず、部分・作用・序数による区別は残っているが、Bauhinは筋を固有の名称によって言及しようとしていたことは

疑いない。

Bauhinが最初に筋肉に固有名を与えた人物かどうかの問題は別にしても、『解剖劇場』が一七世紀において最も頻繁に用いられた解剖学テキストの一つであることを考慮すれば、この書は現代的な筋肉名の伝播に大きな影響を与えたテキストであり、詳細な分析を行う必要がある。